

## ◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

とくべつてんらんかい りんぱ たんじゅう りんぱ みやこ いろど  
 —特別展覧会「琳派誕生400年記念 琳派 京を彩る」—

400年前の  
アニメーション

びょうぶ かけじく まきもの  
 屏風や掛軸以上に、巻物というものはすっかり現代の生活から遠のいてしまったよう  
 です。みなさんのなかで、ほんものの巻物を実際に手に取ったことがあるという人はほ  
 とんどいないのではないのでしょうか。巻物という名前のとおり、横に長い紙に描かれた  
 絵や文章をくるくると軸に巻いたものを巻物、卷子といいます。ときどき、忍者が口に  
 くわえたりしていますね。

意外に思われるかもしれませんが、巻物は図書の一種です。つまり、本屋さんや図書  
 館に並んでいるふつうの本と同じ仲間なのです。ただ、巻物はそうした冊子状の本とち  
 がって、好きなところをぱっと開いたりすることができないぶん不便ですし、長い巻物  
 を巻いたり伸ばしたりするのはめんどろなので、だんだん身の回りから姿を消していっ  
 てしまいました。いまでも、本のことを1巻、2巻などと呼ぶのは、巻物が主流だったこ  
 ろの名残りです。

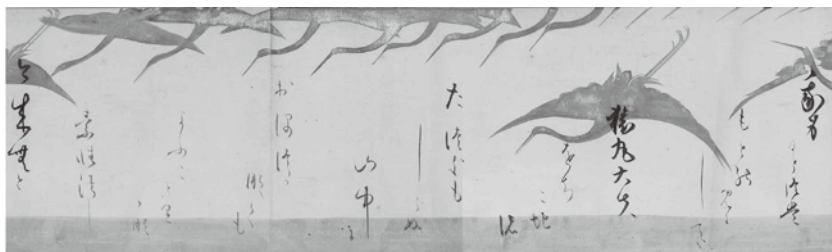


図1 重要文化財《鶴下絵三十六歌仙和歌巻》本阿弥光悦筆・俵屋宗達画 部分 京都国立博物館蔵

では、巻物はたんに古臭い不便なものかという、けっしてそんなことはありません。  
 ページごとに分かれていないため、途切れることなく横に連続する巻物には、ふつうの  
 本にはない大きな魅力が備わっているのです。

そんな巻物の魅力を、京都国立博物館が所蔵する「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」を例にとっ  
 て見てみましょう。この作品は、いまから400年ほど前につくられました。俵屋宗達と  
 いう人が鶴の絵を描き、本阿弥光悦という人がその上から和歌をしたための巻物で、す  
 べてひろげると長さは13.5メートル以上あります。長い巻物をひと目で全部見ることは  
 できませんから、右端から少しずつ見ていくのが作法です。

まず目に飛び込んでくるのは、群れになって地面で羽を休める鶴の姿です。鶴の体は銀、  
 くちばしや脚は金で描かれているので、角度が変わるときらきら光って見えます。そこ  
 から左へと視線を移していくと、翼を広げて空を飛ぶ鶴があらわれます(図1)。画面の上  
 の端から少しずつ伸びてくる、棒のようなものは何でしょうか?—そう、上空から降

りてくる鶴のくちばしですね。少しずつ降りてくる動きが伝わってくるようです。

さらに左へと目を向けてみましょう。下に見えていた陸地はいつのまにか消え、波があらわれました(図2)。鶴たちは海の上に飛んできたのです。やがてこの波も見えなくなり、いつしか鶴たちははるか上空へと昇っていきます(図3)。海を越えた鶴たちはふたたび地面に降り立ち、波打ち際で旅の疲れをいやすのです。

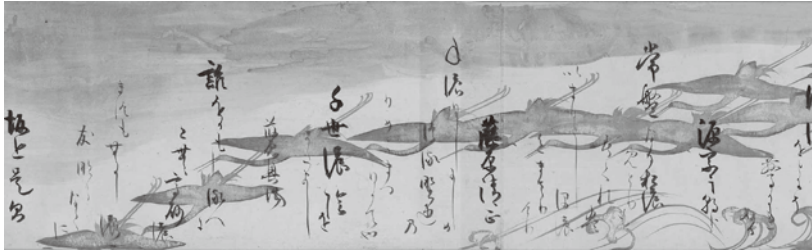


図2 《鶴下絵三十六歌仙和歌巻》部分

こうして見てみると、鶴は地面と上空とを行き来し、さらに海を渡って対岸へと移動していることがわかります。画面の高さは30センチほどしかありませんが、そのなかで垂直方向・水平方向への大きな動きが見事に表現されているのです。しかも、鶴は似たような姿が連続して登場するので、まるでアニメーションを見ているかのような躍動感が生まれています。それを可能にしたのは、巻物という独特の形状であり、その特性を最大限に引き出そうとする画家の工夫でした。



図3 《鶴下絵三十六歌仙和歌巻》部分

俵屋宗達は謎の多い画家ですが、天皇や公家など身分の高い人々の注文を受けて多くの絵を描きました。一方の本阿弥光悦は、諸分野で芸術的才能を発揮し、なかでも書は「寛永の三筆」に数えられるほどに優れた人でした。

そんな二人のコラボレーションは当時から人気を博したようで、これと同じような巻物がいくつか残っています。ところが、そのなかにはのちに短く切断されてしまったものもたくさんあります。なぜだか分かりますか？それは、短くして掛軸にするためです。巻物よりも掛軸の方が部屋の飾りとしては使いやすいために、のちの時代の人が巻物を切って掛軸に仕立てるということは普通に行われました。逆に、この作品のようにもとの巻物の姿を残しているのはとても貴重ですし、おかげでその「アニメーション効果」がよく分かるというわけです。

現代美術作家のクリスチャン・マークレーは、日本の漫画にヒントを得て「Manga Scroll」という巻物形式の作品を制作しています。巻物は、現在も生き続けているのです。

(美術室 研究員 福士雄也)